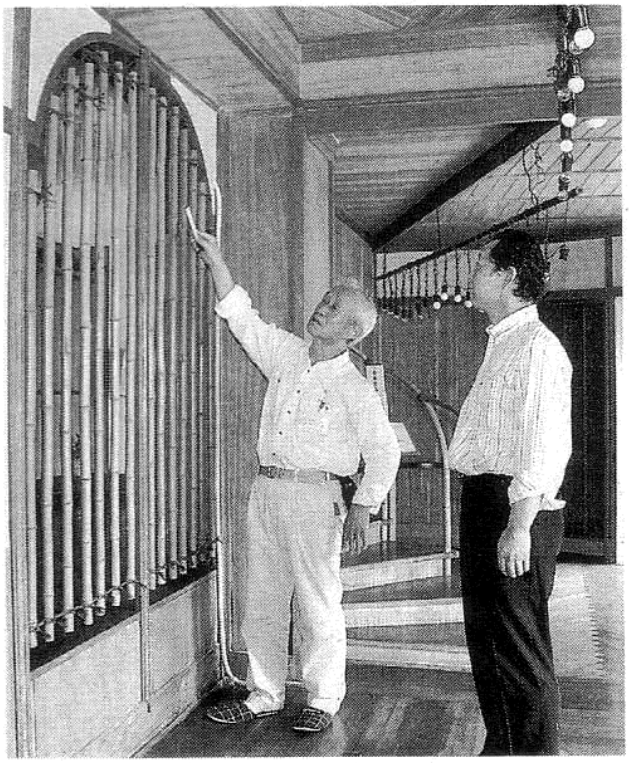
讀賣新聞 200-.5.15

旧日向別邸地下室保存を

ドイツからメッセージ

建築家・タウト設計

ドイツの建築家ブルーノ・タウト（1880～1938年）が設計した熱海市の「旧日向（ひゅうが）別邸」地下室の保存を求めるドイツ建築家協会ベルリン支部長のメッセージが14日、4月に発足した「旧日向別邸保存会」の中井正勝会長(68)から、斉藤栄市長に手渡された。斉藤市長は「市民の力を借りながら、世界の財産として最大限努力したい」と答えた。



「旧日向別邸」の地下室を案内する中井会長（左）

タウトはナチスに追われて1933年に来日。3年余りの日本滞在中、桂離宮や合掌造りなど日本の伝統建築を世界に紹介したことで知られる。

旧日向別邸は貿易商の別荘として建てられた。地下室は36年の完成で、国内に唯一残るタウトが手がけた建築物。キリやケヤキ材がふんだんに使われ、真竹や白竹などをあしらった独特の感性のデザインが目をひく。

その後、別邸は化学メーカーの所有となったが、2004年に市が買い取り、翌年から一般公開している。06年、地下室が重要文化財に指定されたが、傷みが進み、市は昨年11月から今年3月まで232万円をかけ、雨漏りを防ぐための応急の補修を行った。

メッセージは、保存会名誉顧問を務めるタウト研究家の田中辰明・お茶の水女子大名誉教授が今年4月、ドイツを訪問した際に託された。

中井会長によると、ドイツでは、タウトが設計した集合住宅が昨年、世界文化遺産に登録され、タウト作品の保存に向けた機運が高まっているという。

「市民レベルでの保存運動を進め、県にも貴重な文化財の保護を訴えていきたい」と中井会長は話している。問い合わせは保存会事務局の矢崎英夫さん(0550・3608・7749)へ。